

〔論 文〕

殺生行動に関する認識の発達 I

—具体的殺生場面への賛否と判断理由の分析—

三浦香苗・田中千穂*・石井正子

Development of Conceptual Structures for “Life-Destroying Behavior” I
—Analyses of opinions for and against on four concrete examples of life-destroying behaviors and their reasons

Kanae MIURA, Chiho TANAKA and Masako ISHII

We human beings cannot live without destroying other fauna and flora.

This survey was done to investigate how opinions for and against life-destroying behaviors and their reasons differ among different age-groups.

The subjects were 229 5th grade elementary children, 256 7th grade junior high school students, 187 university students and 128 elementary and junior high school teachers. Their opinions for and against 4 different situations, namely, shooting bear for human safety, eating chickens that they had raised, cutting down a big tree to get sunshine, and shooting birds or rabbit for pleasure, chosen from 5-scale answer sheets, and their writings of open-ended reasons, which were later classified into 8 levels from which the authors also elicited 8 types of mental attitudes, were analyzed.

The major results are as follows.

- 1 The rate of affirmative opinion toward the life-destroying behavior grew larger as the age of the subjects increased. But the number of negative answers by both elementary and junior high school students was in the majority in all 4 situations.
- 2 As the age of the subjects increased the level of mature judgment reasons grew higher. But the range of individual differences within the older group was wider than that of the younger group.
- 3 As for types inferred from the dominant judgment levels, the inferior type was prevalent in younger students. But a clear difference concerning types among age-groups was not detected.
- 4 The 8 types did not show any correlation with opinions for life-destroying behaviors.

Key words: *life-destroying behavior* (殺生行動), *development of conceptual structure* (認識の発達), *analysis of reasons* (理由分析), *attitude toward life-destroying behavior* (殺生行動への態度)

問題と目的

筆者らは、5年前から人間が生きていく上で必須の、他の生物のいのちを奪うことについての研究を行っている(長谷川他 2004, 2005, 石井他 2004, 2005,

三浦他 2002, 2003, 2004, 2005, 2006)。現在、「いのちの大切さ」を教える必要性が叫ばれているが、他の生物を食べることによって自己の生命を維持し、種族を繁栄させることはすべての動物にとって必須の行為である。問題となるのは遊びや贅沢あるいは快

* 武蔵大学学生相談室 (Musashi University, Students' Counseling Center)

適性追求のために、主として人間が他の生物を殺生することやその生育環境を破壊することである。また、社会の分業化や階層化が進展する中で、自分は直接殺生に関わらずに、他者が生存のためあるいは職業として行っている殺生行動に対して否定的な言動を行うことである。学校現場では生命尊重に関わるさまざまな試みがされているが、上記の様な全体的枠組みをすべて理解したうえで、個々の具体的場面での行動を理解することは易しいことではない(近藤 2002, 2003, 中村 2003, 得丸 2001)。

筆者らは、生き物を殺生することについての理解には幾つかの認知発達の水準があり、その水準は一般的認知水準のほかに、社会や周囲の大人の価値観や社会的経験、生活体験などの具体的・情緒的経験によって成長・発達していくと考える。そして、子どもたちに「いのちの大切さ」を教育するためには、現段階での子どもたちの認知水準を確認し、それに基づいて現段階を受容したうえで、経験等の教育内容を適切に提示していくことが必要だと考える。

そのため、殺生行動に対する認識構造を解明することが重要であると考え、具体的な殺生行動に対しての賛否と、その賛否の根拠となる理由を尋ね、その理由の水準分けを大学生や教員を対象に行ってきた(長谷川他 2005, 三浦他 2006)。殺生行動に対する賛否は、殺生行動に対する判断であるが、その理由の解明のためには、その背景にある心理的な機制や価値観を知る必要があり、そのためには、賛否を判断した理由を尋ねることが重要と考えた。このような認識は経験や教育によって成長・発達していくと仮定し、コールバーグの道徳性の認知発達の段階をモデルとして、賛否の理由について水準分けを行い、大学生と現職教員の差異を検討した。その結果、大学生と比べ、教員の認識構造が高いレベルにあるということが分かり、殺生行動に対する認識水準が存在することを裏付けるための1つの材料となった。

本研究では、認識水準の存在を明らかにし、それがどのようなものかをみるために、認識の発達途上にあり、学校教育の対象でもある小学生と中学生に同様の調査をし、認識構造のレベルの差異について検討することを目的とする。

方 法

調査対象および実施時期:

千葉市内公立小学校3校の9学級の5年生229名、男子99名と女子130名である。また、中学生は千葉市内の公立中学校3校9学級の1年生256名、男子131名と女子125名である。いずれも学級担任によって、2005年3月に学級活動の時間に実施された。187名の大学生は教員養成系国立大学の学生2~4年生で、生徒指導・教育相談・進路指導に関する選択科目の講義の受講生である。2004年1月に授業の最後の部分に担当教員によって実施された。小・中学校教員は128名の公立学校の教員で、小学校教員1種免許状取得のための認定講習の受講生である。教師経験2~28年、平均経験年数が19年であり、女子教員が75%である。女子教員は主として短大卒、男子教員は現有の教員免許状以外に小学校教員免許取得希望のものである。2004年8月に実施され、講義担当者が講義の初日に配布し、翌日回収した。合計800名が今回の分析対象者である。なお、大学生および現職教員の結果の部分については、三浦他(2006)で報告済みである。

調査内容:

横向きのB4判2枚の調査用紙に、以下の内容を記した順序で提示した。

1) フェイスシート

調査目的の記載の後、児童・生徒向けには、学校・学年を尋ねた。学生向けには、学部・学年・課程、教員向けには勤務先校種・所有免許状・教員経験を尋ねた。

2) 殺生行動に対する賛否とその理由

下記の具体的殺生行動場面4問についての賛否(賛成・やや賛成・どちらでもない・やや反対・反対)の5段階評定と、また、そう考えた理由を自由記述で求めた。

場面1「住宅地にえさをとりに頻繁に出没している熊が危険なので、銃で撃って殺すことについて」

場面2「小学校の体験学習の一環としてひよこの時

から飼っていたニワトリを、さばいて食べる
ることについて」

場面3「日当たりを良くするために、構内の樹齢
100年の大木を切り倒すことについて」

場面4「趣味として、山野でウサギや山鳥を銃で撃
つことについて」

3) 具体的殺生行動の実行可能性

児童・生徒向けの調査では、30の具体的殺生行
動を行うことが可能であるかどうかについて尋ねた
が、この論文では扱わない。他の2群に関しては、
既述（三浦他 2006 参照）のように、他の幾つかの内
容も尋ねた。

結 果

1. 4場面の殺生行動に関する賛否

殺生4場面の平均と標準偏差は、1:「賛成」、2:
「やや賛成」、3:「どちらともいえない」、4:「やや
反対」、5:「反対」の5段階評定で求めた。また、
「賛成・やや賛成」（以下 {賛成} とする）、{どちらと
もいえない}、「やや反対・反対」（以下 {反対} とす
る）の3段階にまとめて百分率を求めたものを表1
に示す。

場面1: 平均値は、小学生群が最も高く3.74で、教
員群が最も低く2.85であった。年齢が高い群

ほど、平均値が低い。また、小学生群は {反対}
が60.3%、{賛成} が12.7%で最も {反対} の
割合が高く、教員群は {賛成} が39.0%、{反
対} が28.1%と {賛成} の割合が高い。

場面2: 小学生群の平均値は4.41で最も高く、教員
群が2.27と最も低い。小学生群の {反対} は
83.0%、{賛成} が5.3%で、最も {反対} の
割合が高く、教員群は {賛成} が57.1%、{反
対} が20.3%と {賛成} の割合が高い。年齢
の上昇とともに、{賛成} 率は高くなるが、教
員群以外は、{反対} 率が過半数を超えている。

場面3: 小学生群の平均値は4.21で最も高く、教員
群が2.01と低い。小学生群の {反対} は
81.6%と高く、教員群の {賛成} は70.3%、
{反対} が14.4%と {賛成} の割合が高い。大
学生群の平均値は小学生群に次いで高く、両者
には差はない。教員群以外の3群は、{反対}
が70%を超え、{賛成} 率が70%を超えてい
る教員群の結果とは際立って異なっている。

場面4: 小学生群の平均値は4.75で最も高く、教員
群が1.88と低い。小学生群の {反対} が
93.9%で、{賛成} が0.8%で、4群中最も
{反対} の割合が高い。教員群の {賛成} は
73.4%である。年齢が高くなるにつれ群の平

表1 各場面における賛否の割合

場 面	対象者	平 均	標準偏差	有意性	{賛 成}	{どちらとも いえない}	{反対} (%)
場面1	小学生	3.74	1.12	p<.001	12.7	27.1	60.3
	中学生	3.45	1.15		21.1	25.8	53.1
	大学生	3.24	1.30		31.0	20.3	48.5
	教 員	2.85	1.26		39.0	32.0	28.1
場面2	小学生	4.41	0.96	p<.001	5.3	11.4	83.0
	中学生	4.00	1.16		10.2	20.3	69.5
	大学生	3.68	1.29		20.3	23.0	56.7
	教員	2.27	1.33		57.1	22.7	20.3
場面3	小学生	4.21	1.09	p<.001	10.5	7.9	81.6
	中学生	4.09	1.05		7.5	19.9	72.3
	大学生	4.20	1.03		5.3	16.0	78.6
	教 員	2.01	1.23		70.3	14.8	14.4
場面4	小学生	4.75	0.61	p<.001	0.8	5.2	93.9
	中学生	4.50	0.91		4.3	10.2	85.5
	大学生	4.17	1.02		5.3	21.9	72.7
	教 員	1.88	1.14		73.4	17.2	9.4

均値が低くなったが、小・中学生・大学生群間の差はそれほど大きくなく、教師群との差は顕著である。

場面間の差異: 小・中学生・大学生群は4場面すべてにおいて{反対}の割合が{賛成}を上回っており、教員群は全ての場面で{賛成}の割合が{反対}を上回っている。平均値で見ると、場面3で大学生群が中学生群よりも高いという例外を除き、年齢が高い群ほど平均値が低くなる傾向が見られた。差異が最も顕著である小学生群と教員群の平均値の差異を見てみると、場面4 (2.87) > 場面2 (2.14) > 場面3 (2.20) > 場面1 (0.89) の順であり、場面4で最も差が顕著であり、場面1で賛否の差は少ない。

2. 理由内容についての分析

具体的殺生場面1~4の賛否の理由についての自由記述を、{賛成} {どちらともいえない} {反対}に関わらず、0: 無記入, 1: 感情的反応, 2: 人間中心, 3: 生命尊重, 4: 生命を考慮した上での人間中心, 5: 葛藤, 6: 譲歩, 7: 統合の8水準に分類した。分類の妥当性は、各水準の定義とともに、共同研究者1名を含む3名によって独立に分類し、4名中3名の一致でその水準とした(詳細は三浦ら(2005)を

参照のこと)。各場面における各水準の小学生、中学生、大学生、教員の出現率(%)を、表2に示す。

1) 場面別の理由水準の分布

場面1: 全群で「5: 葛藤」が最も多いが、群別に出現率を見ると、小学生群 (38.9%), 教員群 (34.6%), 大学生群 (33.2%), 中学生群 (31.6%) の順である。第2位は、群によって異なり、小学生群 (22.3%) と中学生群 (15.6%) は「3: 生命尊重」、大学生群 (24.6%) と教員群 (23.6%) は「2: 人間中心」と異なり、傾向として小学生・中学生群と大学生・教員群に分かれる。第3位では、小学生群 (11.8%) と中学生群 (13.7%) が「2: 人間中心」、大学生群 (11.8%) は「3: 生命尊重」と「0: 無記入」、教員群 (10.9%) は「6: 譲歩」と分かれる。

場面2: 第1位は小学生群 (55.0%) と中学生群 (37.9%) では「3: 生命尊重」であり、大学生群 (25.7%) と教員群 (29.7%) では「7: 統合」であった。第2位は小学生群 (23.1%) と中学生群 (22.7%) が「1: 感情的反応」で、大学生群 (20.9%) は「2: 人間中心」、教員群 (22.6%) は「3: 生命尊重」であった。第3位は小学生群 (8.3%) で「6: 譲歩」、中学生群 (14.5%) と大学生群 (17.1%) は「0: 無記入」、教員群

表2 各場面における水準出現率

場 面	対象者	水準							
		0	1	2	3	4	5	6	7
場面1	小学生	1.7	8.3	11.8	22.3	3.1	38.9	10.5	3.5
	中学生	11.3	7.8	13.7	15.6	5.9	31.6	5.1	9.0
	大学生	11.8	1.1	24.6	11.8	9.1	33.2	2.7	5.9
	教 員	7.1	2.4	23.6	8.6	3.9	34.6	10.9	8.7
場面2	小学生	2.2	23.1	3.5	55.0	0.9	0.9	8.3	6.1
	中学生	14.5	22.7	5.5	37.9	2.3	2.0	4.3	10.9
	大学生	17.1	9.6	20.9	10.7	8.0	3.2	4.8	25.7
	教 員	9.4	5.5	10.2	22.6	14.9	3.9	3.9	29.7
場面3	小学生	1.3	3.1	11.4	11.4	0.9	13.1	59.0	0
	中学生	17.6	2.3	10.5	11.3	1.2	10.5	46.1	0.4
	大学生	23.1	0.5	5.3	16.7	2.7	16.7	31.7	3.2
	教 員	11.7	0.8	6.3	11.7	0	28.1	38.3	3.1
場面4	小学生	1.7	18.8	31.9	34.9	0.9	0.9	10.9	0
	中学生	17.6	14.1	35.9	19.5	2.3	0.8	9.8	0
	大学生	21.4	9.1	24.1	34.8	2.7	1.1	7.0	0
	教 員	13.3	6.3	45.3	20.3	4.7	0.8	9.4	0

(各群の % は各群の全体に対する百分率を示す)

(14.9%)は「4: 生命を考慮」であった。

場面3: 第1位は全群で「6: 譲歩」であり、小学生群 (59.0%), 中学生群 (46.1%), 教員群 (38.3%), 大学生群 (31.7%) であった。第2位は小学生群 (13.1%) と教員群 (28.1%) は「5: 葛藤」, 中学生群 (17.6%) と大学生群 (23.1%) は「0: 無記入」であった。第3位は全群とも「3: 生命尊重」で小学生群 (11.4%), 中学生群 (11.3%), 大学生群 (16.7%), 教員群 (11.7%) であり, 同率で小学生群は「2: 人間中心」, 大学生群は「5: 葛藤」, 教員群は「無記入」であった。

場面4: 第1位は小学生群 (34.9%) と大学生群 (34.8%) で「3: 生命尊重」, 中学生群 (35.9%) と教員群 (45.3%) で「2: 人間中心」であった。第2位は, 小学生群 (31.9%) と大学生群 (24.1%) で「2: 人間中心」, 中学生群 (19.5%) と教員群 (20.3%) で「3: 生命尊重」となり, 全群とも第1位と第2位で「2: 人間中心」「3: 生命尊重」であり, 各群の半分以上の割合を占めた。第3位は小学生群 (18.8%) では「1: 感情的反応」, 中学生群 (17.6%)・大学生群 (21.4%)・教員群 (13.3%) は「0: 無記入」であった。無記入の多い場面であった。

2) 水準別の場面・群の分布

各水準別にどの被験者群が多いかを見る。

水準0 無記入: 全場面で大学生群に最も多く出現し, 次いで中学生群, 教員群となり, 小学生群が最も出現率が低い。この傾向は各場面と同じである。場面3・4にどの群も無記入者が多い傾向にある。

水準1 感情的反応: 全場面で小学生群の割合が高く, 大学生群と教員群は低い傾向である。どの群も場面2と場面4で, 水準1の割合が高い。

水準2 人間中心: 場面4ではどの群も水準2の割合が高かった。次いで場面1に多い。群別に見ると, 場面1と場面2では大学生・教員群が小学生・中学生群より多く出現し, 場面3では小学生・中学生群が大学生・教員群より多く選択し, 場面4では教員群で45%と最頻である。

水準3 生命尊重: 水準3に該当する割合は, 全場面で相対的に高いが, 群別に見ると, 場面との関連は異なっている。場面1では小学生群の出現率が高く, 場面2では中学生群の水準3の出現率が最も高い。場面3では, 群間の差は少なく, 場面4では小学生群と大学生群での出現率が最も高い。

水準4 生命尊重の上での人間中心: 場面2の教員群が10%を超えている以外は, この水準の出現率は相対的に高くない。

水準5 葛藤: 場面1では全群でこの水準の出現率が最も高い。場面2と場面4では全群で5%以下と出現率が低い。

水準6 譲歩: 場面3では全群で水準6の出現率が最も高いが, 他の3場面での出現率はあまり高くない。また, 全場面で小学生群の出現率が最も高い。

水準7 統合: 場面4では出現せず, 場面1~3においては, 教員群での出現率が高く, 小学生のそれは低く, 年齢が高くなるにつれて出現率が高くなっている。特に, 場面2・3では, 小学生・中学生群での出現率は低く, 大学生・教員群との差が顕著である。

水準0と判定される原因となる無記入の理由についてであるが, 被験者群によって調査への協力度が異なる, あるいは質問への飽きという単純な理由のほかに, 迷いが生じたときに無記入を選ぶという可能性が考えられる。小学生群に比して, 大学生群や中学生群は無記入が多いのは, 後者では具体的な殺生場面での反応に葛藤が生じ, それを回避するための方法として無記入を選択したと考えたい。小学生群は他の群に比べ, 「水準1: 感情的反応」と「水準3: 生命尊重」の割合が高いことも葛藤が少ない結果と関連していると推測される。

第1位になる水準は, 全群を通して場面1では「水準5: 葛藤」, 場面3では「水準6: 譲歩」と同一であり, 場面4では小学生群と大学生群が「水準3: 生命尊重」, 中学生群と教員群は「水準2: 人間中心」と分かれたが, 第2位までを考慮すれば, 同一と考えることができよう。しかしながら, 場面2

表3 タイプ分けの基準

タイプ	決 定 基 準
T0 無回答型	理由記述が2つ以下のもの
T1 感情型	1を選択したものが2つ以上のもの
T2 人間中心型	2を選択したものが2つ以上のもの
T3 生命尊重型	3を選択したものが2つ以上、あるいは選択した水準の上位より2番目のものが3
T4 生命尊重の上での人間中心型	4を選択したものが2つ以上、あるいは選択した水準の上位より2番目のものが4
T5 葛藤型	5を選択したものが2つ以上、あるいは2選択の上位のものが5、あるいは選択した水準の上位より2番目のものが5
T6 譲歩型	6を選択したものが2つ以上、あるいは2選択の上位のものが6、あるいは選択した水準の上位より2番目のものが6
T7 統合型	7を選択したものが2つ以上、あるいは2選択の上位のものが7、あるいは選択した水準の上位より2番目のものが7

では小学生・中学生群が「水準3: 生命尊重」と大学生・教員群は「水準7: 統合」と分かれ、第2位も群によって異なった。また、「水準2: 人間中心」と「水準3: 生命尊重」は、全体的に出現率の高い水準であったが、他の水準に比べ、場面によってどの群に多く出現するかが大きく異なっていた。場面によって、群によって、殺生の賛否の理由が異なることが示唆される。

3. 理由水準のタイプ分けによる分析

各個人がどのような理由水準を主として用いているかによって、個人の理由をタイプ分けすることを行った。具体的には、各被験者が4場面でのどの水準の説明を主として用いたかにより、タイプ分けを行った。タイプ分けの基準については、表3に示すが、詳細は三浦ら(2005)を参照されたい。その結果、「T0: 無回答型」・「T1: 感情型」・「T2: 人間中心型」・「T3: 生命尊重型」・「T4: 生命尊重の上での人間中心型」・「T5: 葛藤型」・「T6: 譲歩型」・「T7: 統合型」を抽出した。T1からT7に上昇するにつれ、個人の認識の水準が高くなると想定している。

小学生群・中学生群・大学生群・教員群のそれぞれの各タイプの出現率を示したものが表4である。

1) タイプ別の出現率の分析

T0 無回答型: 大学生群(18.2%)が最も高く、続いて中学生群(13.3%)、教員群(9.4%)、小学生群(1.3%)となり、小学生での出現率が低い。

表4 群別タイプ出現

タイプ 対象者	T0	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7
小学生	3 1.3	16 7.0	17 7.4	90 39.3	6 2.6	51 22.3	45 19.7	1 0.4
中学生	34 13.3	24 9.4	26 10.2	60 23.4	12 4.7	50 19.5	46 18.0	4 1.6
大学生	34 18.2	4 2.1	35 18.7	34 18.2	11 5.9	38 20.7	24 12.8	7 3.7
教員	12 9.4	1 0.8	24 18.8	20 15.6	6 4.7	30 23.4	29 22.7	6 4.7

(上段: 頻度 下段: 百分率)

T1 感情型: 中学生群(9.4%)、小学生群(7.0%)、大学生群(2.1%)、教員群(0.8%)であり、どの群でもそれほど高い出現率とはなっていない。

T2 人間中心型: 小学生群(7.4%)、中学生群(10.2%)、大学生群(18.7%)、教員群(18.8%)と、年齢が高くなるにつれ、出現率が高くなっている。

T3 生命尊重型: 小学生群(39.3%)が最も高い出現率である。続いて、中学生群(23.4%)、大学生群(18.2%)、教員群(15.6%)の順であり、年齢が高くなるにつれ、出現率が低くなっている。

T4 生命尊重の上での人間中心型: 小学生群(2.6%)、中学生・教員群(4.7%)、大学生群(5.9%)、と、どの群も出現率は高くない。

T5 葛藤型: 教員群(23.4%)で最も出現率が高く、続いて小学生群(22.3%)、大学生群(20.7%)

であり、中学生群 (19.5%) が最も低い出現率である。

T6 譲歩型: 教員群 (22.7%) が最も多い出現率である。他群では、小学生群 (19.7%), 中学生群 (18.0%), 大学生群 (12.8%) と、むしろ年少群のほうが高い出現率である。

T7 統合型: 小学生群 (0.4%), 中学生群 (1.6%), 大学生群 (3.7%), 教員群 (4.7%) と相対的に年齢が高い群での出現率が高いが、絶対的には出現率は低い。

T5 以上のタイプでは、教員群での出現率が群間で最も高く、教員群が他の群より高位のタイプの比率が高い。特に最高位と考えられる T7 については、年齢の高い順に出現率は高くなったが、T5、T6 については必ずしもそのような傾向は見られなかった。そのため、T5 以上のタイプの合計は、教員群が 50.8%、大学生群が 37.2%、中学生群が 39.1%、小学生群が 42.4% と、小・中・大学生群間の差は大きくない。この差の少なさのひとつに判断理由を書かなかった T0 の割合が群によって異なったためと判断でき、T0 を除外してタイプの比率を見れば差は大きくなる。

2) 群別のタイプの出現率の分析

小学生群: 「T3: 生命尊重型」が 39.3% と最も多く、続いて「T5: 葛藤型」の 22.3%, 「T6: 譲歩型」の 19.7% である。

中学生群: 「T3: 生命尊重型」が 23.4%, 「T5: 葛藤型」の 19.5%, 「T6: 譲歩型」の 18.0% と、出現率の高いタイプは小学生とその順位も含めて同一であるが、小学生群よりもその比率は低い。T0, T1, T2, T4, T7 の出現率は小学生群よりも高く、多くのタイプに分散している。

大学生群: 「T5: 葛藤型」が 20.7% と最も多く、続いて「T2: 人間中心型」の 18.7%, 「T3: 生命尊重型」と「T0: 無回答型」がいずれも 18.2% と同率である。小・中学生群とは異なる傾向であるといえよう。

教員群: 「T5: 葛藤型」が 23.4%, 「T6: 譲歩型」が 22.7%, 「T2: 人間中心型」が 18.8% の順である。大学生群の傾向と比較的類似した傾向に

あるが、特定のタイプに集中している。

我々は必ずしも高位なタイプと判断しなかった「T3: 生命尊重型」は年齢が高くなるにつれ出現率が低くなっているのに対し、「T2: 人間中心型」は逆に高くなっている。このことをどう考えるべきかは、今後の課題の一つである。

4. タイプ別賛否率

タイプによって、殺生に対する賛否の傾向が異なるかを場面別に見たものが表 5 である。2 場面以上で理由を書かなかった「T0: 無回答型」を除いて、特徴を述べる。

T1 感情型: この型は、学生群や教員群には多く出現せず、小学生・中学生群に多く見られた型であるが、この 2 群では {反対} 率が 4 場面いずれにおいても高い。その傾向は場面 1 を除いた 3 場面で顕著である。

T2 人間中心型: 小学生・中学生・学生群の結果は、教員群とは 4 場面とも異なる。つまり、場面 1 では、教員群のみ {反対} が多く、他群は {賛成} が多い。他の 3 場面では、3 群は {反対} が多いのに、教員群では {賛成} 率が高い。教員群のこのタイプが、場面 1 で {反対} が多いのは注目に値する。

T3 生命尊重型: 小学生・中学生・大学生の結果は、この型でも教員群の結果と異なる。すなわち、3 群はいずれの場面でも {反対} 率が極めて高いが、教員群では {賛成} 率が {反対} 率を上回る。

T4 生命尊重の上での人間中心型: この型の {賛成}・{反対} の分布は複雑である。つまり、場面 1 では小学生群と教員群には {賛成} はなく、中学生群と大学生群では {賛成} 率のほうが高い。場面 2・3・4 では、教員群のみで {賛成} が多く、他の 3 群では {反対} 率の方が多い。これらの結果は、この型に属する人数がどの群でも多くないことが影響を与えたためと思われる。

T5 葛藤型: 小学生・中学生・大学生群に {反対} が多く、教員群に {賛成} が多いという傾向は他の型と同様であるが、場面 4 の「狩猟」を除

表5 各場面におけるタイプ別賛否の比較

TYPE	対象者	人数	場面			1: 熊の射殺			2: 鳥の食肉処理			3: 大木の伐採			4: 狩猟		
			賛成	どちらとも	反対	賛成	どちらとも	反対	賛成	どちらとも	反対	賛成	どちらとも	反対	賛成	どちらとも	反対
T0 (無回答型)	小学生	3	0	0	1.3	0	0.9	0.4	0.4	0	0.9	0	0.4	0.9			
	中学生	34	2.7	3.5	7.0	1.2	4.7	7.4	1.2	3.5	8.6	0	3.5	9.8			
	大学生	34	4.8	5.9	7.5	3.7	4.8	9.6	1.1	4.8	12.4	1.1	3.7	18.2			
	教員	12	4.7	2.4	1.6	5.5	3.1	0.8	6.3	1.6	3.9	6.3	2.3	0.8			
T1 (感情型)	小学生	16	1.7	3.1	2.2	0	0	7.0	0.9	0.9	5.2	0	0	7.0			
	中学生	24	3.1	2.7	3.5	1.2	2.0	6.3	0.4	2.0	7.1	0.8	1.2	7.4			
	大学生	4	0.5	0.5	1.1	0	0	2.1	0.5	1.6	1.1	0	0	2.6			
	教員	1	0.8	0	0	0.8	0	0	0	0.8	0	0.8	0	0			
T2 (人間中心型)	小学生	17	4.4	1.7	1.3	1.8	1.3	3.9	3.1	0	4.4	0.4	0.9	6.1			
	中学生	26	5.5	2.0	2.7	2.0	2.7	5.5	3.1	2.7	4.3	1.2	0.4	8.6			
	大学生	35	11.8	3.2	3.7	3.2	2.7	12.8	2.7	3.8	12.4	1.1	3.2	14.4			
	教員	24	7.1	0.8	11.0	12.5	3.1	3.1	10.2	4.7	3.9	14.1	0.8	3.9			
T3 (生命尊重型)	小学生	90	4.4	10.0	24.9	1.3	3.5	34.6	3.1	3.1	33.2	0.4	0.4	38.4			
	中学生	60	3.5	4.7	15.2	0.4	5.1	18.0	1.2	3.1	19.2	0	1.2	22.3			
	大学生	34	3.2	2.7	12.3	3.7	2.1	12.3	0	1.6	16.7	0	3.7	14.4			
	教員	20	7.1	3.9	4.7	11.7	0.8	3.1	11.7	0.8	3.1	10.2	3.9	1.6			
T4 (生命尊重の上での人間中心型)	小学生	6	0	0.9	1.7	0	0.4	2.2	0.4	0	2.2	0	0	2.6			
	中学生	12	2.0	1.2	1.6	0.4	0.4	3.9	0.4	1.6	2.7	0.4	1.2	3.1			
	大学生	11	2.7	1.1	2.1	1.1	1.1	3.7	0	2.2	3.8	0.5	2.1	3.2			
	教員	6	0	0	3.9	3.1	1.6	0	4.7	0	0	3.1	0.8	0.8			
T5 (葛藤型)	小学生	51	1.3	7.9	13.1	0.9	1.3	20.2	1.7	2.2	18.3	0	1.7	20.5			
	中学生	50	1.2	8.2	10.2	0.8	2.3	16.4	0.8	5.5	12.9	0	2.0	17.6			
	大学生	38	2.7	4.3	13.4	2.1	6.4	11.8	0.5	2.2	17.2	0	4.8	15.5			
	教員	30	7.1	12.6	3.9	12.5	5.5	5.5	14.8	5.5	3.1	18.0	3.9	1.6			
T6 (譲歩型)	小学生	45	0.9	3.5	15.3	1.3	3.5	14.9	0.9	1.7	17.0	0	1.7	17.9			
	中学生	46	3.1	3.1	11.7	3.5	3.1	11.3	0.4	1.6	16.1	1.6	0.8	15.6			
	大学生	24	4.8	2.1	5.9	4.8	4.3	3.7	0.5	0.5	11.8	2.1	3.2	7.5			
	教員	29	8.7	11.0	3.1	10.2	6.3	6.3	18.8	1.6	2.3	17.2	4.7	0.8			
T7 (統合型)	小学生	1	0	0	0.4	0	0.4	0	0	0	0.4	0	0	0.4			
	中学生	4	0	0.4	1.2	0.8	0	0.8	0	0	1.6	0.4	0	1.2			
	大学生	7	0.5	0.5	2.7	1.6	1.6	0.5	0	0	3.8	0.5	1.1	2.1			
	教員	6	3.1	1.6	0	0.8	2.3	1.6	3.9	0.8	0	3.9	0.8	0			

(％は各群の全体に対する百分率を示す)

き、{賛成}が小学生・中学生・大学生群に低率ではあるが散見される。

T6 譲歩型: 率としては、小学生・中学生・大学生群に{反対}が多く、教員群に{賛成}が多いが、全体としては{賛成}率も比較的高い。特に、場面1や2では、大学生群の{賛成}率が高く、中学生群でも{賛成}は、{反対}の4分の1程度は存在する。

T7 統合型: この型に属する人数は多くはなく、特に小・中学生群では少ない。比較的多い大学生群や教員群では、場面によって、{賛成}と{反対}の比率は異なっている。

まとめと討論

小学5年生229名、中学1年生256名、大学生187名、小・中学校教員128名の合計800名を対象

にして、熊の射殺・飼育している鶏を食べること・大木の伐採・趣味の狩猟という4種の具体的殺生場で殺生することの賛否の5段階評定とその理由の自由記述を求めた。

主要な結果とそれに関わる討論を以下に示す。

1) 4場面すべてにおいて、小学生・中学生・大学生群は{反対}の割合が高く、教員群は{賛成}の割合が高かった。

2) 場面3を例外として、殺生行動に対し、年齢が上昇するにつれて{賛成}の割合が高くなった。但し、「大木の伐採」の場面3では、大学生群までは年齢の上昇につれて{賛成}率は減少したが、教員群は{賛成}率が高かった。

大学生と教員間の差について検討した先行研究(三浦他 2006)では、大学生群は4場面すべてで{反対}であり、教員群では{賛成}の比率が高かったが、今回の調査では、小学生・中学生・大学生群の結果は類似したものであった。その差異は程度の差であり、教員群との違いが明確になった。しかし、{反対}の多かった小・中・大学生群の結果は、場面によって異なっていた。つまり、「熊を射殺する」場面1、「飼育していた鶏を食べる」場面2と「趣味で狩をする」場面4では、{賛成}率が年齢とともに増加しているのに、「大木を伐採する」場面3では、{反対}率が増え、{賛成}率が減少していた。

場面3を除く3場面で年齢の上昇につれて殺生に{賛成}が多くなったのは、それぞれの場面での殺生にはそれぞれそれなりの理由があると認識するようになったためと考えられる。これに対し、場面3の「大木の伐採」に関して小学生・中学生・大学生の{反対}率が高いのは、自然保護との関連で大木になるまでの歳月の長さに気づき、それを行うことが取り返しのつかないことであると認識したためであろう。しかし、教員では、構内の大木がもたらす日当たりの悪さという障害や不便を知る当事者として「伐採に賛成」と判断したと思われる。

教員群の結果が、「熊を射殺する」場面1を除き、他の3群と大きく異なった原因については幾つかのことが考えられる。まず、第1に、種々な経験をつ

むことによって、彼らの殺生についての考え方が豊かに、あるいは現実的に、あるいは柔軟になった可能性である。第2に生育経験の差である。教員が生まれ育った時代や環境が大学生以下のものと大きく異なっていた可能性である。第3に、ここで扱った殺生場面が学校教育に関わるものが多かったことに影響を受けている可能性がある。「鶏を食べること」や「大木の伐採」は学校教育の現場と直接関わる問題であるからである。

3) 「鶏を食べる」場面2をのぞき、多く現れた理由水準は場面によって異なっていた。

4) 「鶏を食べる」場面2をのぞき、年齢による理由水準の相違はそれほど大きなものではなかった。

賛否率は群によって大きく異なっていたが、各場面によって、第1位になる理由水準は4つの年齢群間で同一あるいはそれと近い水準のものであった。すべての群で、場面1では水準5の「葛藤」、場面3では水準6の「譲歩」、場面4では水準2の「人間中心」と水準3の「生命尊重」がほぼ同じ割合で上位の水準であった。

ただし、「鶏を食べる」場面2では、第1位の水準が小学生・中学生群では「生命尊重」の水準3、大学生・教員群では「統合」の水準7に2分されていた。

これらの結果は、2つの観点から興味深い。1つはそれぞれの場面での領域固有性である。大学生と教員を比較した前報告(三浦他 2006)でも、今回と同じ傾向が見られたが、我々はそのような結果は彼らが成人であり、それぞれの場面の相違について十分認識していたために生じたと考えたが、小学生群でもそれぞれの場面の相違に十分配慮し、賛否の理由を考えていたと推察される。そして、小・中学生群と大学生・教員群とで、その賛否とは関わりなく、同一の理由水準を多く用いていたのである。

第2には、第1位は場面によって、各群で同一であったにもかかわらず、より詳細に見れば群による差異が見られたということである。第1位の理由のみを考えれば、確かに3場面で4群間に同一の理由が多く選ばれたが、第2・第3位に多く選ばれた理由では、群の間に差があった。それが最も顕著な形

で現れたのが、場面2の「鶏を食べる」であったと考えることができるであろう。

5) 4場面の理由水準の結果から推定した個人のタイプの分布では、高水準のタイプは年齢の高い群に多く、低水準のタイプは年齢の低い群に多かった。

「T4: 生命尊重の上での人間中心型」から「T7: 統合型」といった高い水準のタイプは教員の出現率が4群間で最も高く、教員群に他の群よりも高位のタイプが多く存在することが明らかになった。特に「T7: 統合型」については、年齢の高い順に高い割合となった。「T5: 葛藤型」と「T6: 譲歩型」が小学生群に比較的多かったことは、この群に理由を書かなかったために、「T0: 無回答型」と判断された率が低かったことで説明できるであろう。

また、小学生群は、「T2: 人間中心型」が少なく、「T3: 生命尊重型」が多かったことも特徴としてあげることができよう。これは「人間の勝手に動物を殺してはならない」「生命は大切にしなければならない」といった、与えられた道徳的知識による紋切り型の判断である可能性が考えられる。

6) 理由水準から確定したタイプによって、賛否が異なるという傾向は見られなかった。

同一タイプの中でも、場面によって、また群によって、賛否の割合は大きく異なり、明確な関係は見出されなかった。例えば、該当者数の多い「T3: 生命尊重型」で見てみれば、当然のことながら、{反対}の率は他の型よりは多いが、教員群では{賛成}者の方が多い。「T6: 葛藤型」では、{どちらともいえない}が4場面で相対的に多いが、{賛成}と{反対}の割合は場面によって大きく異なっているということである。この原因については、我々のタイプの推定の仕方、あるいはその前提となる理由水準の確定に問題がある可能性がある。

以上のような結果から、今後の研究の方向性としては以下のようなことが考えられよう。

第1に、使用する場面の再検討である。我々は、異なる問題状況として、ここ数年4場面を用いてきたが、これが殺生行動についての子どもたちの認識を確認し、その認識水準およびタイプを推定するに

十分な妥当性を持っているかどうかの検討の開始である。そのためには、再度、より多くの場面を調査対象とする必要があるだろう。

第2には、理由水準の確定に関してである。我々は、具体的殺生場面を提示し、殺生の賛否を5段階評定で尋ねた後、その理由を自由記述で求めてきた。予め幾つかの理由を提示し、最も適合する理由を選択する方式を採らなかったのは、第1にそれぞれの場面での現実的な多様な選択肢を用意できなかったということ以外に、選択肢を用意することによってより高位な選択肢を選択してしまう傾向を排除しなかったからである。しかしながら、自由記述は、被験者に自分の判断理由を考え、それを文章にするという多大な労力を強いることになる。事実、中学生や大学生に、また、場面の後半に無回答が多くなったことは、自分の考えを記述する面倒くささのために生じたとも考えられる。今回の調査の最年少群は小学校5年生であるが、彼らの回答には短いものが多く、そのためにより低い水準に判定された可能性もある。この問題を解決することが今後の第2の課題である。ただ、これは多様な場面を用意することと矛盾することになると思われる。

また、認識の水準あるいはタイプに影響を与える要因の分析も必要になってくる。我々は、昨年の報告(三浦他 2006)で、大学生および教員の資料に基づいて、水準あるいはタイプに影響を与える要因として、価値観や生育環境を扱っているが、そのような分析を行うためには、かなり多くの調査内容を被験者に実施しなくてはならない。その問題を解決する一つの方策は、異なる生育環境で過ごした子どもたちのデータを取ることであろう。

引用・参考文献

- 長谷川千穂・三浦香苗・石井正子 2004 「いのち」に関わる意識と生活体験4—具体的殺生行動に対する意識の分析—日本教育心理学会 第46回総会発表論文集 p. 350.
- 長谷川千穂・三浦香苗・石井正子 2005 「いのち」に関わる意識と生活体験5—具体的殺生行動に対する意識の分析—日本教育心理学会 第47回総会発表論文集 p. 575.

- 石井正子・長谷川千穂・三浦香苗 2005 「いのち」に関わる意識と生活体験 6—具体的殺生行動に対する意識と生活体験・価値観・殺生行動尺度との関連—日本教育心理学会 第47回総会発表論文集 p. 576.
- 石井正子・三浦香苗・鈴木陽介 2004 「いのち」に関わる意識と生活体験 3—生活体験・価値観尺度の再検討と殺生行動との関連—日本教育心理学会 第46回総会発表論文集 p. 349.
- 近藤 卓 2002 「いのちを学ぶ・いのちを教える」大修館書店
- 近藤 卓 2003 「いのちの教育—はじめる・深める授業の手引き」実業之日本社
- 三浦香苗・石井正子 2003 「いのち」に関わる意識と生活体験 2—大学生の場合の生活体験・価値観・殺生行動の関連—日本教育心理学会 第45回総会発表論文集 p. 3.
- 三浦香苗・石井正子・長谷川千穂 2005 大学生の「具体的殺生行動」に対する認識構造の分析—「殺生行動」に対する賛否判断理由の水準分け—昭和女子大学学苑・人間社会学部紀要 772号 pp. 33-40.
- 三浦香苗・石井正子・田中千穂 2006 学生・教員の殺生行動に関する認識構造を規定する要因—生活体験・価値観・殺生可能性は殺生への態度に影響を与えるか—昭和女子大学学苑・人間社会学部紀要 784号 pp. 19-39.
- 三浦香苗・長澤陽平 2002 「いのち」に関わる意識と生活体験—大学生の場合の殺生行動と生活体験との関連—日本教育心理学会 第44回総会発表論文集 p. 475.
- 三浦香苗・長澤陽平・石井正子 2004 大学生向け殺生行動尺度作成の試み—子ども時代の生活体験の効果の分析を通して—昭和女子大学学苑・人間社会学部紀要 761号 pp. 27-39.
- 中村博志 2003 「死を通して生を考える教育—子どもたちの健やかな未来を目指して」川島書店
- 田中千穂・三浦香苗・石井正子 2006 「いのち」に関わる意識と生活体験 8—具体的殺生行動に対する意識の分析—日本教育心理学会第48回総会発表論文集 p. 736.
- 得丸定子 2001 「学校教育における『いのち教育』の重要性と取り組みについて—特に家庭科教育の視点を踏まえて—」上越教育大学紀要, 第21巻(1), pp. 2-10.

(みうら かなえ 心理学科)

(たなか ちほ 武蔵大学学生相談室)

(いしい まさこ 初等教育学科)